言語的表現と非言語的表現の不一致と不安との関連*

田　中　綾　佳**・富　永　幹　人

The Relationships between Anxiety and Incongruence between Verbal and Nonverbal Expressions

Ayaka Tanaka・Mikihito Tominaga

問題

われわれは、対人関係の中で相手とコミュニケーションを行う際に、言葉だけではなく、表情や声の抑揚、目線、態度、姿勢など非言語的なものでも感情表出を行っている。通常、言語的な表現と非言語的な表現は一致して表出されることが多いが、日常生活の中でこの二つの表現に矛盾が生じることも少なくはない。時に、皮肉や冗談のように、意図的に矛盾したメッセージを送って、コミュニケーションをより効果的に行おうとする場合もあるが（工藤・下村，1999)、それが肯定的な効果を生み出すのは、親しい間柄やそれが許される特定の場面であろう。大薗ら（2010）が表情と言語に矛盾が生じた場合に信頼を失うことを示唆しているように、対人関係の中で言語的表現と非言語的表現の不一致が起きた場合には、一般的には双方の関係の中に疑念や葛藤などの負の関係性が生じやすくなると考えられる。

このような人間関係上の問題の要因となりうる不一致コミュニケーションは、日常生活の中だけでなく、臨床の場でも起こり得る。感情の表出に何らかの葛藤を抱えるクライエントが、自らのつらさを淡々と語ったり、逆に笑いながら話をする事例は多数報告されているし（村重ら，2006；小西，2013など)、セラピストが不一致コミュニケーションを行う場合もあるだろう。織田・佐藤（2003）は、クライエント側の情報処理の過程を検討することを目的とした実験的研究を行い、カウンセラーの自信度や意欲度という側面はカウンセラーの非言語的行動からより影響を受けやすいという結果を得たことを報告している。心理療法場面でのカウンセラーの非言語的な行動は、クライエントとの関係性の構築や、より良いカウンセリングになるために重要な働きをもつと考えられるが、カウンセラーの言語的メッセージと非言語的メッセージにズレが生じる場合、クライエントにネガティブな影響を与える可能性があると言えるだろう。

このような不一致コミュニケーションはなぜ起きるのだろうか。原田・島田（2002）は、自身の社会的スキルを低く評価している者ほど対人不安を感じやすいことを示し、そのような不安からコミュニケーションの不一致が生じうること、そしてそれを受けた側は、不一致を発信した者のしぐさや態度などに影響を受け、不安を感じることになることを示唆している（原田・島田，2002)。不一致コミュニケーションを引き起こす要因には様々なものがあると思われるが、本研究では不安に注目して検討を行う。

ところで、人は幼少期から様々な不安に直面しながらそれを乗り越えて成長していく。エリクソンの発達段階理論によれば、心理社会的危機の過程は個人のなかに、ある種の緊張状態をつくりあげるが、次の段階に進むためにはどうしても乗り越えなければならないものであり（福富，1988)、さらに人生の各段階において顕著となる心理的葛藤を乗り越えることにより、人間的な強さを獲得していくとされている（小野・福岡，2016)。例えば、誕生から2歳までの乳幼児期の心理社会的危機として「基本的信頼感VS.不信」が挙げられているが、その両者の緊張状態の中で「基本的信頼感」の獲得が優位な形でこの危機を解決できるなら、「希望」という力をもつことができる。しかしながら、そのように正の感情が優位な形で解決ができなかった場合には、「不信」という負の感情はその人のパーソナリティの中に残ることになる。それは、不安という形となってその人の認知や行動にも影響を与え、対人関係における不一致コミュニケーションの要因にもなり得るのではないだろうか。

以上を踏まえ本研究では、対人関係におけるコミュニケーション上の言語的な表現と非言語的な表現の不一致のあり方と不安との関連について検討することを目的とする。また、不安や不一致の表れ方には発達課題の達成度においても違いがあるのかについても併せて検討を試みる。

---

*本論文は、2018年度修士論文を加筆・修正したものである。

**社会福祉法人　福岡市社会福祉事業団　福岡市立心身障がい福祉センター　分園すてっぷ長浜

方法

調査期間　2018年11月

対象者　研究参加に同意を得た１年生から４年生までの女子大学生８名

手続き

実験は被験者と実験者の二人で個室で行った。「あなたの今までの人生の中でもいいですし、最近あった出来事でもいいですが、自分の中で最高に楽しかった思い出や、面白いと思ったポジティブな思い出を一つ思い出してください。それは言葉にしなくていいので、心の中で思い返してください。思い出せたら、『はい。』と合図して教えてください」と教示を行う。被験者のポジティブな記憶の想起が確認された後、「今から、先ほど思い出してもらったポジティブな思い出について、出来る範囲で構わないので、私に話してください」と教示し、自由に語ってもらう。実験中の様子は、被検者の了承を取ったうえでビデオカメラにて記録する。

質問紙

STAI（State Train Anxiety Inventory）日本語版

実験に先立ち、不安を測定する指標として、State Train Anxiety Inventory（STAI）日本語版への回答を求めた。この不安尺度は状態不安と特性不安の２つの不安を測定するために作成された。状態不安は今現在、どの程度感じているかを“全くそうではない（１点）”“いくぶんそうである（２点）”“ほぼそうである（３点）”“全くそうである（４点）”の４段階尺度で回答させる。特性不安は、普段、一般にどの程度の状態かを“全くそうではない（１点）”“いくぶんそうである（２点）”“ほぼそうである（３点）”“全くそうである（４点）”の４段階尺度で回答を求めた。

EPSI　エリクソン心理社会的段階目録調査（Erikson Psychosocial Stage Inventory）

本研究では人が不安を抱く要因として、個人の発達段階にけるエリクソンの心理社会的危機の解決状況によって不安の形成がなされるのではないかと考えた。そこで、エリクソンによって定式化された８つの心理社会的段階に応じた発達課題の個人の達成度を測定するために、実験に先立って、EPSI エリクソン心理社会的段階目録調査への回答を求めた。EPSI は、信頼性（trust）、自律性（autonomy）、自主性（initiative）、勤勉性（industry）、同一性（identity）、親密性（intimacy）、生殖性（generativity）、統合性（integrity）の８つの下位尺度があり、各下位尺度とも７項目、計56項目で構成されている。“全く当てはまらない（１点）”“ほとんど当てはまらない（２点）”“あまり当てはまらない（３点）”“かなり当てはまる（４点）”“とてもよく当てはまる（５点）”の５件法で回答を求めた。

結果

被検者の不安の高低による群分け

被検者内の不安高群と低群の違いを見るために、STAI の得点を用いて被検者の群分けを行った。清水・今栄（1981）の STAI を618名（女性：367名）の大規模集団での調査によると、状態不安の平均＝42.25、標準偏差＝9.36、特性不安の平均＝45.66、標準偏差＝8.12と示されている。この数値を基準に＋1SD（状態不安：51.61、特性不安：53.78）以上の者を不安高群、－1SD（状態不安：32.89、特性不安：37.57）以下の者を不安低群、それ以外を不安中群とした。今回は高群に相当する者がいなかったため、中群と低群で検討を行った（表１）。

EPSI の達成度の判定

個人の総得点及び各下位尺度の得点をパーセンタイルへ変換し、それをもとに各発達課題の達成度の判定を行った（10パーセンタイル以下：達成度が非常に低い、10～30パーセンタイル：達成度がやや低い、30～70パーセンタイル：ほぼ達成されている、70～90パーセンタイル：かなり達成度が高い、90パーセンタイル以上：非常に達成度が高い。表１）。

非言語的表現の分析

ビデオカメラで記録した動画映像を１秒１コマの静止画にし、その静止画を用いて表情分析を行った。表情分析の分析指標には FACS（Facial Action Coding System）を用いた。本実験では、楽しかった・面白かったポジティブなエピソードについて話してもらうため、FACS において幸福を示す表情である「頬を持ち上げる」と「口角を引き上げる」の２つの指標で笑顔の評価を行うこととした。また、口角を引き上げているのに、ほほは持ち上げていない反応を「愛想笑い反応」とした。評価は３段階（２点、１点、０点）で、臨床心理学を学ぶ大学院生３名と臨床心理士有資格者１名で行い、評価にズレがあったものについては協議して決定した。さらに、各反応の１点と２点の回数の全枚数に対する割合（%）を求めた（表２）。

不安の強さによる非言語的表現・EPSI の差異

不安の強さによって、EPSI、非言語的表現の出現頻度に差があるかを Mann-Whitney 検定を用いて検討した（表３，４）。その結果、状態不安については、不安中群よりも不安低群の方が、口角（１点）、口角とほほの不一致反応は少ない傾向が認められた。また、状態不安中群よりも不安低群の方が、EPSI の信頼性、同一性、親密性、統合性の達成度が高い人が多い傾向が認められた。特性不安については有意な差は認められなかった。

質的分析

被験者のプロトコル、非言語表現から、言語表現・非言語表現の一致と不一致の特徴についての質的な検討を

表１　各被験者の STAI による不安の群分けと EPSI による発達課題の達成度

		集計点	%	尺度得点		状態不安	特性不安
B							
	総合点	162	90以上	5	非常に達成度が高い		
	信頼性	20	90以上	5	非常に達成度が高い		
	自律性	25	99以上	5	非常に達成度が高い		
	自主性	21	95	5	非常に達成度が高い		
	勤勉性	19	65	3	ほぼ達成されている	47	52
	同一性	21	89	4	かなり達成度が高い		
	親密性	18	75	4	かなり達成度が高い		
	生殖性	15	50	3	ほぼ達成されている		
	統合性	23	95以上	5	非常に達成度が高い		
D		集計点	%	尺度得点			
	総合点	169	95	5	非常に達成度が高い		
	信頼性	18	80	4	かなり達成度が高い		
	自律性	19	90以上	5	非常に達成度が高い		
	自主性	18	75	4	かなり達成度が高い		
	勤勉性	23	90以上	5	非常に達成度が高い	47	47
	同一性	23	90以上	5	非常に達成度が高い		
	親密性	25	99	5	非常に達成度が高い		
	生殖性	20	90以上	5	非常に達成度が高い		
	統合性	23	95	5	非常に達成度が高い		
H		集計点	%	尺度得点			
	総合点	170	95	5	非常に達成度が高い		
	信頼性	17	72	4	かなり達成されている		
	自律性	21	98	5	非常に達成度が高い		
	自主性	20	91	5	非常に達成度が高い		
	勤勉性	23	90	5	非常に達成度が高い	35	48
	同一性	21	85	4	かなり達成度が高い		
	親密性	27	99以上	5	非常に達成度が高い		
	生殖性	21	95	5	非常に達成度が高い		
	統合性	20	89	4	かなり達成度が高い		
G		集計点	%	尺度得点			
	総合点	211	99以上	5	非常に達成度が高い		
	信頼性	25	99以上	5	非常に達成度が高い		
	自律性	30	99以上	5	非常に達成度が高い		
	自主性	26	99以上	5	非常に達成度が高い		
	勤勉性	26	99	5	非常に達成度が高い	32	40
	同一性	29	99以上	5	非常に達成度が高い		
	親密性	24	98	5	非常に達成度が高い		
	生殖性	28	99以上	5	非常に達成度が高い		
	統合性	23	97	5	非常に達成度が高い		
F		集計点	%	尺度得点			
	総合点	210	99以上	5	非常に達成度が高い		
	信頼性	28	99以上	5	非常に達成度が高い		
	自律性	25	99以上	5	非常に達成度が高い		
	自主性	23	98	5	非常に達成度が高い		
	勤勉性	28	99以上	5	非常に達成度が高い	36	39
	同一性	28	99以上	5	非常に達成度が高い		
	親密性	26	99以上	5	非常に達成度が高い		
	生殖性	23	98	5	非常に達成度が高い		
	統合性	29	99以上	5	非常に達成度が高い		
C		集計点	%	尺度得点			
	総合点	176	97	5	非常に達成度が高い		
	信頼性	24	99	5	非常に達成度が高い		
	自律性	21	98	5	非常に達成度が高い		
	自主性	21	95	5	非常に達成度が高い		
	勤勉性	23	90以上	5	非常に達成度が高い	37	36
	同一性	22	91	5	非常に達成度が高い		
	親密性	24	98	5	非常に達成度が高い		
	生殖性	18	82	4	かなり達成度が高い		
	統合性	23	95以上	5	非常に達成度が高い		
A		集計点	%	尺度得点			
	総合点	236	99以上	5	非常に達成度が高い		
	信頼性	30	99以上	5	非常に達成度が高い		
	自律性	29	99以上	5	非常に達成度が高い		
	自主性	21	95	5	非常に達成度が高い		
	勤勉性	31	99以上	5	非常に達成度が高い	29	35
	同一性	32	99以上	5	非常に達成度が高い		
	親密性	31	99以上	5	非常に達成度が高い		
	生殖性	32	99以上	5	非常に達成度が高い		
	統合性	30	99以上	5	非常に達成度が高い		
E		集計点	%	尺度得点			
	総合点	235	99以上	5	非常に達成度が高い		
	信頼性	28	99以上	5	非常に達成度が高い		
	自律性	34	99以上	5	非常に達成度が高い		
	自主性	28	99以上	5	非常に達成度が高い		
	勤勉性	23	90以上	5	非常に達成度が高い	27	25
	同一性	33	99以上	5	非常に達成度が高い		
	親密性	35	99以上	5	非常に達成度が高い		
	生殖性	20	90以上	5	非常に達成度が高い		
	統合性	34	99以上	5	非常に達成度が高い		

不安高群　不安中群　不安低群

表 2　各被験者の非言語表現の点数とその割合

	ほほを持ち上げる		口角を引き上げる		全枚数	愛想笑い反応
	1点	2点	1点	2点		
B	16(15%)	19(9%)	45(42%)	10(9%)	106	31(29%)
	26(25%)		55(52%)			
D	13(5%)	13(5%)	107(40%)	21(8%)	269	101(38%)
	26(10%)		128(48%)			
H	8(3%)	8(3%)	120(52%)	12(5%)	231	107(46%)
	16(17%)		132(57%)			
G	22(13%)	9(5%)	68(41%)	18(11%)	167	55(33%)
	31(19%)		86(51%)			
F	20(13%)	9(6%)	62(39%)	11(7%)	157	44(28%)
	29(18%)		73(46%)			
C	23(21%)	14(13%)	57(52%)	18(16%)	110	37(34%)
	37(34%)		75(68%)			
A	11(7%)	24(16%)	36(24%)	28(19%)	151	29(19%)
	35(23%)		64(42%)			
E	2(1%)	8(3%)	48(16%)	9(3%)	298	46(15%)
	10(3%)		57(19%)			

表 3　状態不安における Mann-Whitney の U 検定の結果

	U	Z	有意確率
ほほを持ち上げる(1点)	2.00	-1.34	.29
ほほを持ち上げる(2点)	5.50	-.17	.86
口角を引き上げる(1点)	.00	-2.01	.07
口角を引き上げる(2点)	6.00	.00	1.00
信頼性	.50	-1.84	.07
自主性	3.00	-1.03	.43
勤勉性	3.50	-.89	.43
同一性	.00	-2.01	.07
親密性	.00	-2.01	.07
生殖性	3.50	-.84	.43
統合性	.00	-2.13	.07
不一致反応	.00	-2.00	.07

表 4　特性不安における Mann-Whitney の U 検定の結果

	U	Z	有意確率
ほほを持ち上げる(1点)	7.00	-.15	1.00
ほほを持ち上げる(2点)	4.50	-.91	.39
口角を引き上げる(1点)	4.50	-.90	.37
口角を引き上げる(2点)	5.00	-.75	.57
信頼性	2.50	-1.50	.14
自主性	5.00	-.76	.57
勤勉性	6.00	-.48	.79
同一性	3.00	-1.35	.25
親密性	3.50	-1.20	.25
生殖性	7.50	.00	1.00
統合性	2.50	.11	1.00
不一致反応	3.00	-1.34	.25

行った。全被験者のまとめを表 5 に示す。

A さんの特徴

状況不安、特性不安ともに低群である。導入部分でこそ声が小さめで、多少の緊張があったことがうかがわれるが、好きなことについて感情が伴って話をするときは口角とほほが同時に上がっており、率直な表出が行われていた。愛想笑い反応は、聴き手が話をしている際や、被験者の体験に対して「すごいな」と褒める場面で見られた。

不一致度は19％と 2 番目に低かった。一致については、「○○の時に楽しいと思えた」「○○があったから嬉しかった」など、楽しい話をする際に見られた。そのときの楽しい感情を積極的に表出し、聴き手に伝えていると言える。

B さんの特徴

被験者の中では比較的不安は高いが、その場の空気を読み、適した表情に切り替える（表面的に愛想笑いで合わせる）ことができることから、不一致度は低くなっている。

一致は、楽しかった思い出や経験を話すときに見られ、率直に楽しい感情を表出できていた。不一致は、その楽しかった思い出について具体的に説明を求められた

表 5　各被験者の特徴のまとめ

	状態不安	特性不安	エリクソンの発達課題	言語表現と非言語表現の不一致	言語表現と非言語表現の一致
B	47	52	勤勉性、生殖性：3 同一性、親密性：4 他：5	言語的な表現内容としては楽しい話をしているが、落ち着かない様子が見られた。	楽しかった思い出・経験に触れながら話すとき、純粋に楽しい感情を表出できている。
D	47	47	信頼性、自主性：4 他：5	言語的な表現では嬉しさや達成感があったことを話しているが、表情表出は口角が引きあがるだけという部分があった。また、「きついです」と笑顔で言ったりするなど、言語表現と遠い非言語表現をすることがあった。	聴き手の反応に敏感に反応し、笑うところで言語的表出と非言語的表出が一致している。
H	35	48	信頼性、同一性、統合性：4 他：5	楽しい話をしているが、感情表出が表情として現れていなかった。	聴き手に対しての強い同意や、聴き手の話に笑う際に、表現の一致が起きる。
G	32	40	全部：5	聴き手が「何か自分の中で感じたことありましたか？」と尋ね、しばらく考えてから話し始めた際は、非言語表出の愛想笑い反応が多かった。 不一致：見られなかった。	被験者の楽しかったエピソードを話しているときや、何でそれが楽しかったか説明してる際に、非言語表現が一致していた。
F	36	39	全部：5	不一致：見られなかった	「楽しかった」「またやりたいと思った」「うれしかった」など、自分のポジティブな感情を話す際に、非言語表現の一致している場面が多かった。
C	37	36	生殖性：4 他：5	不一致：見られなかった。 表情が豊かというわけではなく、ニコニコとしていてワンパターンであった。	終始、口角が引きあがっており、にやにやとした印象であった。楽しかったことを話す際は、聴き手に伝わるくらいにっこりしていた。
A	29	35	全部：5	不一致：見られなかった	楽しい思い出を話す際、素直にその時の感情を伴って言語化することができ、自分のタイミングで話すことができる。
E	27	25	全部：5	不一致：はE6のように、「すごく楽しいなって感じました」と話すが、表情としての感情表出は見られなかった。	基本的に表情の表出が少ない。 実験者が被験者の意図を汲み取って言語化し、聴き手と被験者が2人で共感できたところでは、非言語表現と言語表現の一致が見られた。

場面で見られた。いわゆるデュシャンスマイル（本当の笑顔）は見られなくなり、身振り手振りが大きくなり、自分の身体に触れる回数が増え、また視線は下がり、聴き手側を向かないなど、落ち着かない様子となった。Bさんは今回の被験者の中では不安は高く、自分の言葉で“説明をする”という事に苦手意識を持っているように推測される。求められると頑張って話をしようとするが、落ち着きがなくなったり、表情が乏しくなるなどして不一致が起こってくると思われる。

Cさんの特徴

不安得点は低い方であったが、状態不安が中群に位置している。終始ニコニコしているが、自分から話すことは少なく、聞かれたことには答えるというスタイルであり、聴き手側は、「話をどうにかして繋がないといけない」という感覚を覚えている。

一致は、楽しかったことを話す際に見られ、聴き手に十分その楽しさが伝わるくらいにっこりしていた。不一致反応は、「いつの出来事か」「どこであったのか」といった詳細な事実関係を想起する際にいくらか認められたが、終始ニコニコしており、大きな非言語表現と言語表現の不一致は見られなかった。自分が話すことはあまりせずに結果的に聴き手側が話をさせられるような力動が働いており、それによって不安の防衛をしていると推察される。

Dさんの特徴

口角のみの笑顔が序盤に集中して見られたことは、新奇場面への不安と関係があると思われる。また、「その時、どんな気持ちでしたか」と聞かれ、自分の感情を想起するときにも口角のみの笑顔が見られた。Dさんの特性不安は被験者の中で2番目に高く、その特性的な不安の強さが、内面にある気持ちを表出する際に影響していたと考えられる。DさんのEPSIの結果では、信頼性と自主性が4点で今回の被験者の中ではやや低めであり、Dさんの不安は、発達課題の達成の仕方が関連していると言えるかもしれない。

言語表現と非言語表現の不一致は、自分の感情を話す場面で見られ、嬉しさや達成感があったことを話しながら表情表出は口角が引きあがるだけなど、自発的な感情表出を抑制している傾向にあると考えられる。表面的な笑顔に加え、知的・論理的にまとめた話し方も多く見られたが、それらによって自身の不安感をカバーしていることも推測される。

Eさんの特徴

不安の得点は低く、話し方はゆっくり落ち着いている。しかしながら表情の表出が乏しく、聴き手の話をさえぎって話すなど自分のペースで話す。また、事実関係は具体的に話せるが、その時の感情を言語化するのは苦手な様子であった。全体を通して、話し方、表出の仕方など、自分のペースであり続けるところが特徴的であった。

一致は、聴き手が被験者の意図を汲み取って言語化し、聴き手と被検者が2人で共感できた場面で見られた。また、不一致は、表情の表出のないまま、「すごく楽しいなって感じました」と話すような形で見られた。

Fさんの特徴

状態不安、特性不安ともに平均よりは低いが、中群に位置する。口角のみの笑顔は少なく、話の途中視線が下になることは多いが、大事なポイントごとに実験者の方を見て伝えるなど、積極的に聴き手に話を伝えようとするところが見られた。

一致については、「楽しかった」「またやりたいと思った」「うれしかった」など、自分のポジティブな感情を話す際に、非言語表現も伴う形で多く見られた。言語表現と非言語表現の不一致と言える部分は見られなかった。

Gさんの特徴

状態不安、特性不安ともに中群に位置し、話したいことを簡潔に言葉で説明することには苦手さがある様子だったが、自分が楽しかったことについて話す際、苦手な説明も放棄することはせず、むしろ、身振り手振りも使って楽しさを聴き手に伝えようとする様子が全体を通して見られた。

一致は被験者の楽しかったエピソードを話しているときや、なぜそれが楽しかったか説明する際に見られた。言語的表現と非言語的表現の不一致と言える箇所は見られなかった。

Hさんの特徴

状態不安は中群、特性不安は高群に位置し、不一致反応の割合は被験者の中でも最も高かった。Hさんは、聴き手が質問したことに答えていくスタイルであり、さらに自分の楽しかった話をする際にも表現が控えめで、聴き手の反応をうかがう様子が見られ、緊張や不安の高さが現れているようであった。EPSIにおいて信頼感の得点が被験者の中でもっとも低く、同一性と統合性も点数が低めであった。これらのことも含めHさんは、他者に対する信頼感を持ちにくく、対人関係において素直に感じたことを表出することに難しさがあるのではないと推察される。

一致は、聴き手に対しての強い同意や、聴き手の話に笑う際に見られた。一方、被験者から話をする際には、ほとんどに不一致反応が見られた。楽しい話をしながら、表情に感情表出が伴っておらず、その要因として特性的な不安の高さから相手の反応をうかがってしまうことが考えられる。

考察

非言語表現と言語表現の不一致と不安との関連について

本研究の目的は、日常的なコミュニケーション上において表出される、非言語的表現と言語的表現の不一致と

不安との関連について検討することであった。しかし、今回の研究では、本来目的で述べたような非言語表現と言語表現の不一致と認められるものは少なかった。その理由の一つとしては、被験者の数が少なかったことと被検者の心的健康度が高かったことが考えられる。しかしながら、本研究で扱ったデータにおいても、状態不安が中程度の者の方が低い者よりも口角とほほの不一致反応が多く認められ、不自然な表情が現れるときに不安が関与している可能性が示唆される。また、言語的表現と非言語的表現との不一致が見られたのは不安の得点が高い者に多かったことから、不一致と不安とに関連があることは示唆された。より具体的には、自分の気持ちを自分の言葉で説明することの苦手さや、聴き手に自慢と思われるのではないかといった評価懸念などが働いていることがうかがわれた。自慢話を自慢げに話さないという場合を考えると、たとえば自慢話をしたいと思いながらも、相手を不快にさせないだろうかという不安が働くために、自慢気な印象を与えまいと抑制的な話し方をするなど、そこでは相容れない複数の感情が働いていると思われる。言語的表現と非言語的表現の不一致は、心の中の不一致の表れであり、不安がそれを引き起こす大きな要因となっていると考えられるだろう。

こうした不安は評価懸念だけではなく、様々なものがあると思われ、発達課題の達成度によって不安の現れ方や不一致の起こり方にも特徴があるのではないかと考え、検討を行った。今回の結果では、状態不安と信頼性、自主性、同一性、親密性に関連が見られた。これらの発達課題で獲得される信頼感や自信の感覚が、自分を相手に対して表現すること、あるいはそのときの不安に大きく関わっていると推察される。しかしながら、今回の被験者数が少なかったこともあり、詳細な検討までは行えておらず、さらなる検討が求められる。

不一致が見られない被験者の特徴

不一致がほぼ見られなかったのは、A、C、F、Gの４名の被験者であった。Cを除いて、積極的に楽しかった体験を表現する傾向が認められた。

これらの群について質的分析の結果から共通して言えることは、楽しかった話について自分から積極的に話すことができるということである。また、言語的に説明することが苦手であったとしても、回避しようとはせず、身振り手振りを駆使するなど、自分の苦手さをカバーしながら、相手とのコミュニケーションに努めていた。さらに、楽しい話をする際には感情も伴って話をしていた。苦手さがあってもそれに捉われたりはしておらず、自己受容的であり、安心感や自己肯定感をもっていると考えられる。

不一致が見られる被験者の特徴

不一致が認められたのは、B、D、E、Hの４名の被験者であった。

これらの被験者は、Eを除いて比較的不安が高い群に位置し、エリクソンの発達課題の達成度においても信頼性や同一性、親密性、生殖性において低い得点が見られた。

質的分析の結果から、言語的に表現することがもともと苦手であり、苦手さの対処の方法として自分が話さずに相手に話させるなどの形で、自己表現をすることを回避しようとする傾向があることが窺われる。さらに感情表出が乏しいこと、具体的な想起には時間がかかること、聴き手が話す際に大きな笑顔を見せるなど、聴き手への過剰な配慮が感じられるといった特徴が見られた。これらの背景には、他者に肯定的に受け入れられるかどうかに関する不安が働いていると思われる。

このように自発的・積極的な感情表出が少ないという傾向が見られるが、被験者が十分に表現しきれずにいる感情を聴き手が汲みとり、肯定的に触れることができたときには、感情表出が促される場面が観察された。このような表現したいけれども表現しきれずにいる感情を汲みとる対応は、不一致が解消される契機となると思われる。

まとめ

言語的表現と非言語的表現の不一致は、心の中の不一致でもあり、そこには不安が働いていることが示された。その不安を理解することや、表現するにできないでいる感情を汲みとる対応は不一致の解消の契機となることが示唆された。これについては臨床場面でも有効であると思われるが、今回の研究では被験者数が少なかったことや被験者の心的健康度が比較的高かったことから、観察された不一致は限られたものであり、十分なことは言えない。今後、より幅広い対象のデータをもとに検討を重ねることが求められる。

引用文献

大薗博記・森本裕子・中嶋智史・小宮あすか・渡部　幹・吉川左紀子（2010）表情と言語的情報が他者の信頼性判断に及ぼす影響　社会心理学研究 26（1），65-72

織田信男・佐藤正恵（2003）カウンセラーの属性評定に及ぼすカウンセラーの言語的・非言語的行動の不一致と表象型と面接回数の効果について　アルデス　リベラレス（岩手大学人文社会科学部紀要）73，11-16

小野聡子・福岡欣治（2016）心理社会的発達段階としての統合性と自我の強さとの関連―施設を利用する後期高齢者を中心に―　川崎医療福祉学会誌 25（2），323-332

小西　徹（2013）高齢期に夫と死別した女性との心理療法における老いの受容過程　心理臨床学研究 31（3），399-409

工藤　力・下村陽一（1999）不一致メッセージに関する研究　大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 47（2），449-469

清水秀美・今栄国晴（1981）STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版（大学生用）の作成　教育心理学研究 29（4），62-67

谷山　牧・甲斐一郎・高橋　都（2005）医療面接時の意志の非言語行動が与える影響―模擬診療場面ビデオの作成と内容妥当性の評価―　医学教育 36（3），177-183
髙橋美奈・松野隆則（2017）自伝的記憶の想起が感情状態・自己肯定感に及ぼす影響　昭和女子大学生活心理研究所紀要 19，59-69
宮谷真人・高野義昭（2007）ポジティブな自伝的記憶の想起が感情に及ぼす影響―記憶の重要度と鮮明度及び想起者の抑うつ傾向の影響―　広島大学心理学研究 7，1-10
中西信夫・佐方哲彦（1983）青年期における同一性に発達―エリクソン心理社会的段階目録（EPSI）の改訂　昭和 57 年度文部省教育研究開発に関する調査研究報告書（関西青年心理研究会）：幼児・児童・生徒の心身発達の状況と学校教育への適応について，5-21
原田朋枝・島田 修（2002）社会的スキルの自己評価と対人不安との関連　川崎医療福祉学会誌 12（1），75-81
バーバラ M. ニューマン・フィリップ R. ニューマン（福富護 訳）（1988）新版　生涯発達心理学―エリクソンによる人間の一生とその可能性―　川島書店
村重勝也・上地安昭・松本　剛（2006）娘離れをテーマとする母親との時間制限カウンセリング事例　生徒指導研究 18，32-41